

保育のいずみをくむ

堀合文字先生に伺う

〈出席〉

堀合 文字 (十文字幼稚園)

田中三保子 (お茶の水女子大学)

附属幼稚園)

上坂元絵里 (同 右)

嶺村 法子 (中央区立明石幼稚園)

編集部

お忙しい保育のあい間に、現場の若い先生方にお集まりいただき、保育の大先輩である、堀合文字先生を囲んで、現代の保育、子どもたちに対する思いを伺ってお話をすすめていただきました。(編集部)

◆ よく見る 見ぬく

— 本誌三月号の「現代の幼児教育を考える」で、子どもをよく見る。よく見て、何を言おうとしているのかをつかむ」と、先生はお書きになっていますが、子どもをどう見て、それからどうするかというようなことからお話しいただけますか？

H. どうするかというよりも「見ぬく」ということにつきるのですが……。『見ぬく』といっても、子どもの方が表してくれるのです。表してくれたことを、一言も見のがさないということ。たとえこっちで作る手伝いをしていても、耳はあちらこちらの方から聞こえてくることにも対して、もし変なら、「あら○○ちゃん、それ、おかしいわ」と言えるように、全身の神経をはりめぐらせるようなものを持っている。ただ集中して、目の前のことだけやっているのでは、ダメでしょう。そこが一人一人を大切に、きめ細やかに、というのではないかしら。ただ子どもが来たから、その子に細やかに、というのは誰にでもできます。子どもは活動している時にいろいろと表しています。表さないのでは困る。そのために遊ばせてい

るんですが…。見えない所は時々見に行き、つかんでおく。そしてその時に「それはおかしい」とか「それはいやね」とか、一言でいいから必要なら言っておくことが大切なんです。自分の所に来た人だけはいねいに、じゃなく、常に全体を見ている、意識の中に入れておくということですね。

◆ 遊ぶ

――保育の現場にいと、保育者はつい遊びの中心になつてしまいがちなのですが、私たち大人はどう遊んだり、かかわったりしたらいいのでしょうか。

H・（保育者が）自分で先だちになつて遊んでしまつてか、子どもを遊んであげる、というのはだめなんです。そして、子ども達を、大きわぎしてひっぱりまわして遊ばない、ということですね。子どもが育たなくなるのです。

遊ぶ方があるのです。三歳児の場合はちょっとちがうけれど……。おにごっこなんかかしていても、子ども達の行かない所に逃げていく。そうすると常に先生中心でなく子ども達だけで遊べるようになりますね。子

どものつもりになることかしら。だけど現実には大人だから体は目立つでしょう。いるだけで先生の方を追いかける。だからおにごっこに入っているように入っていかないような形になる。そうしながら一緒に遊び、そして友だち同士の関係をつけてゆくようにするので。すると子どもは、こんな事を続けてゆくと今度は自分の頭で考えて遊びだす。先生は目立たない方がいいのですね。

最近の子はよく遊べます。幼稚園に入園してきた時にはもう一人遊びが上手にできるし、どんどんよく遊べる。入園当初から遊んでばかりしてあげていると、大きい組になつて遊べなくなつてしまう。だから、子ども達にまかせていわゆる自由に考えて遊ぶようにしておいた方がいいですね。すると子ども達がいろいろ自分から考えてきます。そして要求もしてくるのでそれに応えてあげる。その時、ただ、子どもが言ってくれば何でもいいというのではなく、もう少しこうしたらとか言うこともあります。子どもは自分のやりたいことだから頑張れるのですね。だから「もう少し頑張らしましょう」と言えるし、子どもも頑張ろうとす

る。先生が遊びを提供したり先生がふりまわして遊ぶと子どもの中の頭も働かないし判断もつかないし、頑張りも自分からは出せません。その時は楽しそうにみえてもよく子ども心の判断をしたときを考えてみた方がよいですね。子ども達にやってあげるとは遊んであげることではなく、手をかけてあげるといことです。精神的にも手をかけてあげる、両方です。はじめ「先生、これできないからやって」と言ってくる、それを一つ一つやってあげていると、今度はできるようにも甘えて「やって!!」と言ってくることもある。それでもやってあげるんです。甘えは承知で。そうすると子どもの中身が成長してきます。やりすぎるといことではないんですね。そういう意味でも、今の子どもは敏感ですね。世話をしてあげ要求をみたしてあげると子ども自身の中味が働いて成長する。相手をしてあげ遊んであげればその先生はよくしているように結論は子どもをつぶしている事になる。子どもたち一人一人の心の中につねにいるという事で、その判断が先生としてむずかしい一つでしょう。

◆ トラブルの解決

——子ども同士でトラブルがおきたような時は、どうなさっていらっしゃるのですか？

H. 若い先生は、よく子どもに聞いていますね。当事者の誰ちゃんと誰ちゃんをよんで……。はじめに誰ちゃんがどうしたとか、理屈で解決しようとする。そうすると先生自身も満足し、子どもも満足した様ですが、子どもは先生のさとの言葉もみな受身となり、こんな事のくりかえしではその時はわかったつもりでも本当に反省はしないので、ただ頭の中に叱られた事のみが残りません。理屈はあっても現場はちがうのです。だからあっさり、けんかは両方悪いんだから「ごめんなさい」でいい。熱心なのはいいんですが、熱心が却っておかしくなってしまう。

——大人は何か解決させてあげようとするんですね。最終的なことは、子ども達にまかせた方がいいということですか？

H. そう。年長と年少はちがいますけれどね。

——両方悪い、ということ、先生は成敗せいばいをしていないということですね。黒白をつけていない。その辺で、

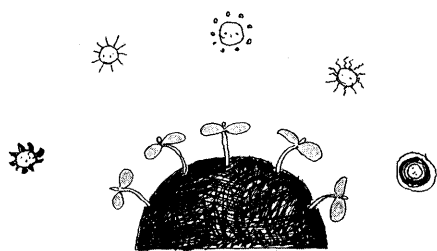
けんかをした方もされた方も、何か感じている……。

H. これからの人達には、友達関係がうまくいくということ

ことは大事なことで、お互いに子どもだから、ぶつかり合うけれど……。そういう時に人を許すとか、大人なら和解とか許し合える、そういう人を育てなければならぬ。それから、この国全体でも組でも、皆仲間、友達という意識をもたせなくてはだめ。よく「けんかの扱い方」「子どもなりの言い分、考え方を聞いてあげる」「なんて理論家の人が言うけどそうじゃない」と私は思う。この組の人は縁があつてここにいる、皆友達なんだから。小さいうちは、まちがえてやっちゃったり、ちよつとふれただけでも怒る、でも、皆友達なんだから許してあげましょ、とあっさり許すということ、大事ですね。世界に出て行く人たちだから……。今だに相も変わらずケンカしてガンとゆずらない子がいる、昔はただケンカのやり方だけだったけれど、今はもつと広く考えていった方がいいですね。今、こういう環境にすることが大きくなってひびいてくると思うから。自分だけで、まわりは敵という社会ですからね。

——こだわらない気持ちを持つということですね。かわりの中で、どうすれば相手にわかつてもらえるのか。例えば、ボクはこうしたいのに、○ちゃんが横から入ってきたというような時、自分のルールが相手に伝わらない、でも一緒に遊びたい、というような場面があります。相手にどう伝えたらいいのかというようなことは？

H. そんなことは考えなくていい。入りたいという気持ちがある。他のことは考えない。「○ちゃんも入りたみたいよ。教えてあげたら？」と子どもに渡す。や



たたらに大人が介入しない。おそらくもっと生意気な人だったら「○ちゃん、これわかないんだよ!!」って言うでしょ。こういう子は「それだってわかないんだもん」って又言うんですよ。でも、その場は「それでもよく教えてあげてね」といって、その人についてはそういうことがある、ということを通して記憶しておく。理屈で友だちをやっつけるのはよくないと思う。もう少し包容力があってもいいと思うの。そういう人は大きくなって又、人を理屈で攻める大人になる、それはしたくないですね。だから、そのことを先生が一つ頭の中に入れておいて、ちがった場面で「あなた、それやらない方がいいわ」とか「それはふざけヨ」「そんな理屈は言わないの」ということをちゃんと覚えておかないと、ますますひどくなる、そういう人は思うように自分が大将になるし、ぎまりのわからない子を入れてあげない」というような方向にもいきかねない、だから、入れてほしいといって入れてもらえない人を頭に入れるよりは、逆にに入れてやらない方の人を頭に入れておく方がよいですね。そして、何かの時に言ってあげる……。

——ケンカがおこったからどうしようという細かい一つ一つではなく、その子一人一人をどううけとめるか、どういう方向にもっていくか、この子のためにこうなってほしいと思うかなんですね。ここで問題を解決していくというのではなく、その問題の子を育てていくのですね。

H. 一人一人も一つの場だけで理解させたり育てたりでなくすべての面からその一人の子どもを育てていくという考えが大切です。ケンカが解決したからそれではないのです。

◆ 今の保育は中身が問題

H. 場面がどうこうではないのです。その人でしょ。例えば、ふざけてばかりいて真剣にウルトラマンをやらない。本人はじゃましている訳じゃないが、まわりの人はじゃまだと思うわけ。その時に「それはおふざけだからやめて」と言う。それをそのままやらせておくと、五歳位になると常習になり、みんなもそれを認めてしまい、その人は何でもおちゃらかしていく人間になってしまう。裏を返せば不真面目。これはよくない

ですね。

——家庭でも、テレビのまねしつこけたりするの
も、大人がユーモアとみなしている。子どもだからや
れば可愛いし、まわりをわかせて笑いをとる。家庭で
もある。世の中の風潮、お笑い番組的ですね。

H. 大きくなってやったっていいんです。でもその場を
考えてやってほしい。こういう世の中だから、あるの
はしかたがない。だから、その場を考える判断をつけ
てもらうように、今からおさえておく。言っておかな
いと、ずーっとそういう人になってしまう。あの人は
そういう人だ、と言われるのが怖いのではなく、その
人がそういう人になるのが怖い。だから、真面目な時
は真面目に。何かの時にふざけるのはかまわない。そ
れだけの判断力をつけておかなければならない。こう
なってくると、今の保育は本当に「中身」です。この
人のこれが残っては困るとか、この人の成長したあか
つきのことを考えるのであって、学校がどうこうでは
ない。何を作るから良い悪いではなく、本当に中身と
中身のぶつかりあい、それで勝負するしかないです
ね。

——そういうことが、はじめにおっしゃった「見ぬく」
というのですね。

H. そうです、そうです。

◆ 自由の線

H. もう一つよくきかれるのは、どこまでやらせるか、
自由の問題ですね。本当の自由とは……規律があっ
て、それをふまえて本当の自由感を味わうというのが
定義のようなものですね。

とつくみあいなんかやっていると、「マネだけよ」
と言いながらも、人の見えない所へ行つてやっている
とこちらは心配になる。でもやらせていい。決して、
危ないからやめなさい、なんて言わなくていい。とこ
ろが、こちらは神経を相当使う。ぎりぎりの線までや
らせてここまできて「あっ、そこでやめて」と止め
る、ここの線が大事。この線までは自由に、ケンカし
ようがある程度は……。いくら約束があっても、やっ
てしまう場合がある。それでもよく見ていたら、こ
の線があるので。ただちゃんばらやっているのなら、
たくさんやらせてかまわない。でもひょっとした

拍子に突きさす格好をすることがある。こういう時には「それはダメ」と言う。今の子はゆだんがならないんです。親もいけない。ニュースなどで残酷場面があっても、見せてちゃんと説明したりする。だからいけないの。うっかりすると、平気になっていく、中学生位になると。見のがしていく可能性はあるんです。情報過多だから、子どもにも入ってきてしまう。だから、昔やった保育を今の子にはできないんです。本当に。前はよく、子どもと一緒に遊んでいたんですが、今は逆に、子ども達の中に遊びに行こうかなと思って、まてよ、あんなによく遊んでいるのならば、遊びに入らずに、ちがうところへ入れてもらおう。でも遊びながら他の人の事もちゃんと見ています。

——三学期になると、子どもだけでちゃんと遊ぶようになるんですね。

H. そうしないと、自由に伸びない。いくら、うちの園では自由のびのびやっていますといっても、のびのびしすぎてこの一線を越せば放任になる。これより前に言えば阻止したことになる。この線——ここまでのこの世界というものが大事。これを越えたらだめ、手

前でもだめ。ここを見極めることを努力するとよいのですが……。相当な努力です。

——一生懸命見ていけば、その線は分かるものではないか？ 自分なりに。

H. そうですね。それは分かります。見ていてウツとここまで出るけれど、もう少しやらせてみようと思う。三歳のホヤホヤではできない。ある程度の所までこなければね。くればのびのびと自分でやりたいこと、勝手に近いことをやりだす。頭が発達してくれば悪いこともやり出す。それをちゃんと観察していかないとめちゃくちゃになってしまう。見ていけば「そこまでね」と言えますね。一人一人にいちいち言わなくても、一回言えはいい。ただ、この線を見つけるのが大変かもしれません……。言葉で説明するのは中々むずかしいですが、大体分かるはずですよ。

——見つけられるようになるまで大変ですね。

H. ある程度、こちらが我慢します。悪いことをする場合もありますね。将来しては困る、例えば同じ刀でも、突きさしたら困る。それはだめです。

——私たち新米の教師は、先生のおっしゃった一線を、

子ども達との“約束”として決めたがるのですが：
…。先生はクラスの子ども達との約束は？

H. 殆んどないですね。その子一人一人です。この園として、今日はあそこがぬかるみになっているから行かないで”というような事務的なことはあるけど……。よく帰りの集まりの時「今日は○ちゃんがケンカしていたけど、皆どう思う？」なんてやっているけれど、そんな必要はないんです。結局、ある程度は子どもを信用しなくてはいけません。そうやって一学期からやっていくわけです。一学期は我が強い人や、がまんできない人がいたりしても、はじめは知らん顔したり、満足させてあげたり、いろいろな方法をとってやってきて、二学期すぎると、中身が伸びたなど感じるわけですね。三歳も四歳も、程度はちがうけれどもっていき方は同じ。遊びの中身はちがうけれどやってあげることは同じです。

—子ども自身の側からは自分がどんな能力を持っているという風に使ったらいいなんて分からない訳だから、先生が良さを分かかって、良く出した時にはほめてあげ、まずかった時にはそれはちょっと、ということ

をしていく。子ども自身にこういう風にしていくのがいいんだなと感じさせるようなことをしていかねければならないですね。

H. そう。子どもがそこで考える。それだけでいい。感じたり、考えたり、頭も働くからいろんなことがでてくる。教えたことでなくても、知らないうちにできちゃう。それだけでいいんです。

—それだけというのが一番むずかしい……。やってやってということには、要求が表に出てくるので誠意をつくして応えることはできませんが、まあ要求にもよ



りますがそれ程むずかしいことではないですね。でも、子どもの持っているものをとらえて、この辺は困るからおさえていかなくはという点を見極め、一つずつやっていくことが一番むずかしいですね。

◆ 知識は捨てて、無になる

H. むずかしいですね。だけど、もっとくだいて言うところと保育者自身、感じたままを言った方がいい。これをもう少し良くしてあげようというようなことは誰も思うけど、させて教えてよくしようというのは捨てた方がいい。そしてもろに「自分」であった方がいい。そうすればものが見えるんです。三角のものをみて、これをもう少し丸くしたいなんて思わないでしょう。決してゆがんでいないものをこちらが持ち合わせていないとだめなのですね。だからやたらに「私は先生になったんだ」なんて気持ちはない方がいい。ただふらりと保育室へ行つて「あら、そこちがうわ」とか「ずい分きたないわね」と見たままを言えはいい。四歳だからこうしてあげなきゃ、こう教えなきゃ、などは全部捨てた方がいいです。捨てられないのかしら。

——捨てられないというより、分からないんです。捨てていいものかどうか。捨ててしまった後、何も残らないのではという不安もあります。

H. 何も残らないなんてことは絶対ない。実習生の方にも、みんな捨てていらっしやい、捨てなきゃ現場へ出られないです、といっているんです。捨てたつてなくなるものではない、そこにじみ出てくる良さが尚あるわけです、本当は。

——残りは人間性だけですか？

H. そうはなりません。学問がちゃんとあります。それは捨てられないものです。それが後ろでちゃんと働くから大丈夫です。考えようとするからだめ。朝きて、「おはようございます」といってもたもたしている子を見て、「あの人、早く自分ですればいいのに……」なんて思いながら見ているより、やってあげた方がいい。その方がよっぽど良い先生です。入口まできてもたもたした人だったら、靴を出してあげた方がいい。無条件でやってあげた方がいい。無にならなさい。自分を無にしないとそういうものが見えてこない。もう少し早くとか、あいさつができないとか、そんな目で見て

はだめ。あいさつをしようがしまいが、こちらがちやんとすれば、するようになるんです。見たものをいう、それがいいんです。そのくり返し。一人一人ちがうから一人一人にする。その方がこちらの気持ちが届いて、受け入れてくれる。特にここら辺が昔とはちがいますね。前は子どもも察して受け取ってくれたけれど、今の子は本当にこちらの暖かい心を待っている。だから言葉で言うと、反撥したりして、怒れないんです。

—「やめなさい」ではなく、「やめた方がいいんじゃない?」と言うと、子どもは言われてやめるのではないのですね。

H. 先生の心の読み方、子どもの受け取り方がちがうんですね。暖かさがちがうでしょ?

—それは、表現のテクニクじゃなくて、先生がその子をどう見たかということの表現の結果ではないでしょうか。「やめなさい」と言った時には、その子それがイヤだと思っているかもしれない。「やめた方がいいんじゃない」と言う時には、その子をもう少し暖かくつつんで受けとめ、「でもない方がいいわ

ね」という気持ち。おそらくその結果だと思う。だから子どもは言われた、「言葉」ではなく「心根」をとる、ということですね。

H. その神経の敏感さはすごい。鋭いですね。だから言葉は気をつけないと……、よほど危ない場合は言いますけれど、命令の言葉は殆んど使えませぬね。

◆ 気持ちをくんでくれる

—最後に分からない所をもう一度……。先生はよく、「保育者は考えなければいけない」とおっしゃいますが、例えば子どものするを見ていて、思ったことを全部言うと子どもには響かないし、聞いてくれなくなる。だからそういう部分を考えなくちゃいけないのかな……。あ、ここは私自身が止めなくてはいけないのかなとか、自分の価値基準でなくても、困ったと思わなければいけないのかなとか、そういう変な所で考えることがあるとすごく思うんです。後は自分の修業なんです。例えば、きたない所をきたないと感じるか、困ったと思わなければ困ったと言いがたい自分の問題……。

H. そう、あとはその人の価値感というか、大変なレベルになる。でも、もっと思わなければ、感じなければいけないのではと思いきる必要もない。例えば、園の中の大人同士の約束で、「……は危ないからしない」というのがある。自分は別にかまわないという気持ちもあって、ここまではと思って見ている、というような時。でもそういう約束が大人にはあるわけ。そしてら仕方がない。ただ、それを言う時の言い方を変えたらいい。ただ「ダメ」ではなく「ちょっとそれ我慢してくれない」という。それは大人の世界の団体の一つのきまりなんだから仕方がない、これはどの園でもあると思う。それで若い方が困ってしまう場合もある。極端な場合、園長さんの理解がなくて……ということもある。でも園としてのきまり、ということであれば、その中にいる以上は、園児である以上は、我慢してもらうよりないですね。

—そういう言い方をすればそれなりに子どもには受けとめてもらえますね。

—こちらものすごく素直に生きなくてはいけない。やらせてあげたい気持ちはあるけれど、仕方ないから

我慢してね、と正直な気持ちを言わざるを得ない。

H. そうです。その言い方によっては、子どもは逆にそのこと自体よりも、気持ちを持っていつてくれるからありがたいし、こわいです。そこは子どもだからありがたいし、そういう風にもつていかないとだめでしょうね。今の人は気持ちをすごくくむ。ものすごく持つていつてくれる。本当に心を包容してあげるといいう気持ちは持つていけばいいんじゃないですか。今の人はそちらの方が大事。こちらのお子さんを本当によくもつていつてくれるから、今のお子さんはそれを一生懸命やらないと育たないということですね。すべて幼児にあるのでなく、先生がいかに頭を使うか、感じるか、神経も使うか、その人によるので今のお子さんでなく保育者自身の問題です。それが今の幼児教育の現場の声ですね……。

お話はまだまだ続きましたが、誌面の関係で、ここで終わらせていただきました。堀合先生、諸先生方、どうもありがとうございます。 (編集部)